Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **53**, 91–98(2005)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

和装関連書籍に見る和装品メンテナンスの知識の継承とその問題点

－最近(1954年～2005年)の雑誌関連記事の記述量と内容から－

磯　映美，横川　公子，上田　一恵
(武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科)

Transmission of knowledge concerning cleaning and maintenance of traditional Japanese garments

according to literary sources (1954-2005)

Eimi Iso, Kimiko Yokogawa, Kazue Ueda

Department of Human Environmental Sciences,
School of Human Environmental Sciences,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

This article discusses the generation gap as regards the transmission of knowhow concerning the maintenance and cleaning of garments and accessories, especially traditional Japanese kimonos, and reformed kimonos. As in modern day-to-day family life, parent and child do not seem to lose much time on the subject, we concentrated on the transmission of knowhow through the channel of literary sources, i.e. books and magazines.

During the years 1954-2005, we picked up 35 books at random and examined the number of pages dedicated to the cleaning and maintenance of kimonos. We found out that the percentage of these pages compared to the total number of pages in books concerning cleaning arrived at a mere 2,8%; even including instructions how to fold and store the kimono only 4,6 %.

Around 2002, we perceived a dramatic change in the younger generation's perception of the kimono as a fashionable item, as opposed to the cooler, detached reception of the older generation. The instructions of the 1950's explaining how to unsew a kimono disappear; and instead appear around 2000 helpful advice how to avoid soiling a kimono in the first place, and then to bring soiled kimonos to a kimono laundry, if unsure.

1. 目　的

2005年7月に実施した和歌山市の和装クリーニング店「張正」におけるインタビューにおいて，「衣料品(特に和装品の)メンテナンスに関する知識の伝授が世代間で完全に断ち切れている」という指摘があった[1]．親から子への伝授が現実生活でなくなってしまっているならば，書籍による知識の普及はどうなっているのか，本稿では，この点を中心に調査・検討する．

近現代の歴史を見ても，明治期の婦人雑誌の発刊以来，こういった生活関連知識の書籍による普及は，その時々の要請に応える啓蒙的な方向で扱われてきた[2]．こうした書籍に掲載された記事の分析によって，

和装の手入れに関する内容がどのようなもので，またどのような視座から取り上げられているのかについて跡付けることが，本研究の前提としても重要であり，興味深いことではある．しかし本稿では出発点として，現在における動向を主たる調査対象として取り上げる．そこで，管見によるものであるが，現状の仮説的な展望に到達することを試みた結果，いくらかの見解に到達したので報告する．なお和服の手入れに関する知識が実生活に普及・浸透する実態については，道具や洗剤などの用剤，技法に関する記憶や残された衣料品に見られる手入れの痕跡などの調査と分析といった，具体的な視点からの検討も可能であり，またそうした調査が要請されると思われるが，この点については今後の課題としたい．このような調査を進める上でも，今回の調査は注目すべき課題を抽出する上で有効と思われるのでここに報告することとした．

関連書籍としては，①専門家向けの技術書ではなく，②啓蒙を狙った教科書のような概説書のほか，③一般消費者への知識の普及に密接にかかわる街の書店で容易に購入できる書籍までが注目できる．いわゆるハウツーものや教養書である．最近では，④インターネットによる情報の発信やその利用が普及しているため，この側面についても見渡す必要があるが，今回は取り上げていない．本稿では③の一般消費者への知識の普及に密接にかかわる，街の書店で容易に購入できる書籍を，主たる対象として調査・検討する．

2. 調査の方法

別表1「和装関連書籍におけるお手入れの記述量調査」は，1954～2005年の間に一般消費者が書店で容易に入手できた書籍35点をアトランダムに抜き出し，着物類の手入れに関する記述(以下，「手入れ記事」と表記)の頁数が，その書籍全体の頁数に対して何パーセントを占めているかを調べたものである．

2-1. 対象書籍について

以上の書籍は，「婦人実用書」「趣味のエッセイ」「ビジュアルムック」「婦人雑誌の付録」に分類できる．形態も新書版から大型本まで様々である．書籍の主要目的は，「着つけ」「和裁」「着物入門書」などに分かれ，着物の手入れを主要目的にしたものはこの中に入っていない．つまり，「着つけをマスターしようとする場合」「和裁を学ぼうとする場合」「着物についての一般知識を知ろうとする場合」「どんな着物があるのか知りたい場合」の実用目的に対応しているという実情，つまり着物に関する知識がほとんどなく，手入れにまで意識が進んでいない場合に，消費者が手に取った書籍の中で，追加情報としての「手入れ記事」がどの程度取り扱われているかを調べるのが，本調査のそもそもの目的である．

2-2. 参考書籍について

一般消費者対象の手入れ記事が主要に取り扱われている書籍のうち，比較的入手しやすいものが2点ある．ただしそのうちの1点は，10年前の発行ですでに絶版である．もう一点は大型書店でないと手に入りにくい．小規模な書店では取り扱いが少ないため，一般消費者が容易に入手できるものとは言い難い．そこで，今回はこの2点A・Bを，比較対象のために参考として取り上げた(表2)．

2-3. 調査における留意点

手入れ記事の割合を算出する際に，着物や帯の畳み方を手入れと見なすかどうか疑問があったため，別項でカウントし，それ以外の項目と並立させた．畳み方以外のお手入れに関する記述の構成要素は，「着たあとの始末」「しみ・汚れの始末」「洗濯」「仕立て直し」「収納・保管」などがある．以下，表1，2から読み取れる点を列挙する．

3. 参考書籍における手入れ記事の割合

表2で見るとおり，手入れを主眼にした参考書籍の中において，書籍全体に占める手入れ記事の割合は，A:37.0(畳み方を含めて42.9%)となっている．Aにおいては，主要記事は古いシミや汚れのある着物や帯を色掛けや柄足しなどで更正した実例を示すビジュアル主体．それに続いて着物類の変質クレーム実例記事となる．これは保管の際の化学反応や繊維そのものや加工の欠陥などを解説したものであって，消費

Table 1. 和装関連書籍における手入れ記事が書籍全体に占める割合

No.	種別	書籍名	著者	発行所	発行年	判型	総頁数	ページ数 カラー	ページ数 その他	たたみ方図説	手入れに関する記述頁数※	たたみ方以外の手入れ記述の割合	たたみ方含む手入れ記述の割合(%)
1	趣味	はじめての私の着物	河村一子	河出書房新社	2003	単行本ソフトカバー	127	88	39	2	2	1.6%	3.1%
2	実用	一人でできる着付けときもののマナー	山野寿子監修	主婦と生活社	2001	単行本ソフトカバー	159	32	127	6	3	1.9%	5.7%
3	趣味	石田節子のきものでおでかけ	石田節子	阪急コミュニケーションズ	2004	単行本ソフトカバー	169	29	140	0	3	1.8%	1.8%
4	趣味	私たちの着物術	近藤よう子&お着楽倶楽部	河出書房新社	2003	単行本ソフトカバー	159	16	143	0	12	7.5%	7.5%
5	趣味	きもの，着ようよ！	平野恵理子	筑摩書房	2003	単行本ソフトカバー	174	41	133	0	0	0.0%	0.0%
6	エッセイ	心は，きもの主義	中谷比佐子	情報センター出版局	1984	新書版ワイド	238	0	236	0	3	1.3%	1.3%
7	エッセイ	きもの着ます．	原　由美子	文化出版局	2003	大型本	79	64	15	2	10	12.7%	15.2%
8	エッセイ	京のきもの語り	市田ひろみ	草思社	2004	単行本ソフトカバー	182	46	136	0	2	1.1%	1.1%
9	実用	続きものに強くなる	家庭画報	世界文化社	2004	大型本	242	201	41	8	18	7.4%	10.7%
10	実用	自分で着られる，着せられる着つけと帯むすび	岩佐佳子	日本ヴォーグ社	2001	大型本	90	50	40	4	0	0.0%	4.4%
11	実用	一人で着るデイリー着物	NHKおしゃれ工房別冊	日本放送出版協会	2002	ムック	103	96	7	3	1	1.0%	3.9%
12	実用	ひとりで着られるはじめての着つけと帯結び	監修 石田節子	成美堂出版	2000	大型本	127	127	0	4	4	3.1%	6.3%
13	趣味	今いちばんかわいいおしゃれ KOMONO あそび		KK ベストセラーズ	2003	ムック	95	80	15	1.5	0.5	0.5%	2.1%
14	実用	赤ちゃん・子供・婦人・男子　和裁と和装	主婦の友 11月号付録	主婦の友社	1956	雑誌付録	256	47	209	0	7	2.7%	2.7%
15	実用	新時代の和服	主婦の友 11月号付録	主婦の友社	1954	雑誌付録	226	42	184	1	11	4.9%	5.3%
16	実用	きものレッスン	主婦の友生活シリーズ	主婦の友社	1990	大型本	121	106	15	4	1	0.8%	4.1%
17	実用	はじめまして私の着物		ブックマン社	2004	大型本	96	64	32	4	1	1.0%	5.2%
18	実用	決定版　家じゅうの着つけと帯結び	主婦の友新実用 BOOKS	主婦の友社	2004	単行本ソフトカバー	191	176	15	3	3	1.0%	3.1%
19	実用	着付け　帯結び　選び方　きもの	監修 小泉清子	西東社	1993	単行本ソフトカバー	222	8	214	6	12	5.4%	8.1%
20	実用	はじめてでもできるきものの着つけと帯結び	笹島寿美	ナツメ社	2004	大型本	159	96	63	14	12	7.5%	16.4%
21	実用	装いから仕立てまできものと和裁の百科	主婦と生活別冊	主婦と生活社	1981	雑誌	310	46	264	6	12	3.9%	5.8%
22	趣味	着こなしの染と織きものと帯	岩佐佳子	日本ヴォーグ社	1984	大型本	112	112	0	0	0	0.0%	0.0%
23	趣味・実用	森田空美の知的きもの入門	森田空英	小学館	2004	大型本	111	111	0	0	2	1.8%	1.8%
24	実用	きものが好きになる本	北村富巳子	オリジン社	1994	新書版ワイド	191	0	191	4	6	3.1%	5.2%
25	実用	新・着付と帯の小百科	長沼　静	日本文芸社	1992	新書版ワイド	206	24	182	2	3	1.5%	2.4%
26	実用	美しく装う　きものなんでも百科	清水とき	大泉書店	1993	新書版	202	0	202	8	10	5.0%	8.9%
27	実用	着るコツ　着せるコツ　新感覚の着付け	長沼　静	小学館	1986	新書版ワイド	141	64	77	2	2	1.4%	2.8%
28	実用	きものに強くなる	家庭画報	世界文化社	1998	大型版	258	202	56	7	3	1.2%	3.9%
29	趣味	ふだん着物のたのしみ方	きくちいま	河出書房新社	2003	単行本ソフトカバー	126	126	0	2	2	1.6%	3.2%
30	エッセイ	娘に伝える　きものがたり	武田頂子	秋山書店	1991	単行本ハードカバー	246	0	246	0	2.5	1.0%	1.0%
31	実用	きもの入門	特選実用ブックス	世界文化社	2005	単行本ソフトカバー	144	128	16	6	2	1.4%	5.6%
32	実用・エッセイ	きものであそぼ Text Book	遠藤瓔子	祥伝社	2003	新書版ワイド	243	0	243	1	21	8.6%	9.1%
33	実用	TPO 別きものの基本	特選実用ブックス	世界文化社	2005	単行本ソフトカバー	144	128	16	0	4	2.8%	2.8%
34	趣味	KIMONO 道 vol.2	SHODEN-SHA MOOK	祥伝社	2002	ムック	87	72	15	0	0.75	0.9%	0.9%
35	趣味	KIMONO mio	TJ MOOK	宝島社	2003	ムック	78	64	14	0	0	0.0%	0.0%
												98.0%	161.5%
									全　体			2.8%	4.6%
									2002 年以降 19 点			3.2%	4.9%
									2001 年まで 16 点			2.3%	4.3%

Table 2. 手入れを主眼とした参考書籍における手入れ記事の割合

参考A	実用	きものクリニック	別冊美しいキモノ キモノ入門シリーズ	主婦と生活社	1995	ムック	119	32	87	7	44	37.0%	42.9%
参考B	実用	着る前着た後 キモノのしたく片づけ	笹島寿美	神無書房	2003	大型本	76	76	0	13	10	13.2%	30.3%

者が自らの手で対応できるものではないので，手入れ記事とは見なさずカウントしなかった．手入れ記事と見なした部分の内容は，「汚れを未然に防ぐ方法」「脱いだあとの手入れ」「収納・保管方法」「浴衣などの洗濯方法」「仕立て替え」となっている．が，収納・保管に関する記事については，和箪笥の紹介・解説に14頁がさかれ，ややカタログ的であるので，厳密に言えば手入れ記事の割合はもう少し低く見るほうが妥当かもしれない．

参考書籍Bにおける手入れ記事の割合は，13.2%(畳み方を含めて30.3%)である．この書籍は「着物を着る前に準備すべきことおよび着方」の方の割合が高いため，着たあとの手入れ記事が全体の1割強程度となっている．

この2点の書籍を見た限りでは，手入れを主眼にした書籍でも記事量は多いとは言えず，手入れについて具体的・詳細に記述してあるとは言い難い．

4. 和装関連図書全体(表1)からいえること

(表1)から量的に言えることは，次のようになる．

① 書籍全体に於いて占める割合が高くない．手入れ記事は2.8%，畳み方記事を含めても4.6%にすぎない．手入れ記事は，100頁の書籍の中で5頁にも満たない程度の扱いだということになる．

② 手入れ記事は，ほとんどがモノクロまたは2色刷のサブ頁にある．ビジュアルで見せる内容ではなく，文章やモノクロ写真で充分だと，捉えられているといえる．

次に手入れ記事のなかで「手入れ記事」に取り上げられる割合の高い内容に注目する．(表1)の35点の中で多いものから順番に並べると，以下のようになる．

① No.7－12.7%　② No.32－8.6%　③ No.4・No.20－7.5%　④ No.9－7.4%

実際の内容構成は，以下のとおりである．

No.7「きもの着ます.」に関しては，全頁数が少ない(79頁)なかで，手入れ記事とみなした15頁のうち9頁を，仕立て替えのカラー実例写真で占めている．これは他のものと比べて異色である．具体的なノウハウよりもビジュアル主体であるが，扱われている着物類がすべて著者の私物であるため，実際に手元にある古いものを更正させて再度着ることができるのを示すのに，頁数を多く割こうという意欲があるのが感じられる．

No.32「きものであそぼ Text Book」では，手入れの価格目安や八掛の天地替えなど，かなり細かく述べられているが，写真がないため読者への伝達度はやや劣るかもしれない．また石鹸でシミをごしごし擦る，ホワイトガソリンで染み抜きするなど，少し乱暴な方法も述べられているので信頼性がやや低い．

No.4「私たちの着物術」は，書籍そのもののコンセプトが「着物を活用する裏技・テクニック集」といったもので，実際の着物着用者からのアンケートを集めた体験談集と見なされる．和装研究家からの指導ではなく，一般消費者の実像が見られるが，その発言内容に関する正確度は曖昧である．他書にない「悉皆屋さんインタビュー」があるのが特長である．

No.20「きものの着つけと帯結び」は参考図書Bと同じ著者によるもので，参考図書Bのダイジェスト版が本書の一部を占めているということになる．

No.9「続きものに強くなる」は，その7年前に出版されたNo.28「きものに強くなる」の続編として発行されている．手入れ記事は7頁から18頁に増え，内容の変化がかなりある．No.28に表記されなかった着物の洗濯の種類(部分洗い・丸洗い・生洗い・洗い張り)の説明があり，モノクロ頁とはいえ，専門家によ

るメンテナンスの実際を多くの写真を用いて解説している．それは，この2冊の発行時期の間に，着物着用者，つまり着物関連本の読者層，その興味の対象の変化があったためではないかと考えられる．

5. 着物情報の画期的変化と年次的変化ー結果および考察ー

5-1. 2002年の変化ー「きもの」から「KIMONO」へ

No.34『KIMONO道(現:KIMONO姫)vol.2)』の前号にあたる創刊号vol.1(2002年)の発行が，着物関連本の読者層を大きく変化させた．

2002年以前は，高級品である礼装用着物を高級なハレの場所で着るために，間違わず恥をかかないで着るノウハウが記事の主体であり，読者層も年齢層が高く想定されていた．が，2000年前後のカラフル浴衣の流行の影響もあり，それ以後，ファッションとしての和装という流れが現れる．

その流れに乗って『KIMONO道』では，20～30代の若年層に安価な古着をそれまでにない着方で着る方向性を示した．また和装にほとんど馴染みがない若年層に対しては，ノウハウを示すよりも，ビジュアル主体のカタログ的要素を強く打ち出した扱いかたをして，対応している．この後，雨後の筍のように同様の書籍が続々出版されることになる．これには同時期のインターネットの普及も手伝って，これまで呉服店とは縁のなかった若年層が，古着屋の情報を容易に知ることができるようになったことも拍車をかけたものとおもわれる．2002年は，こうした和装関連書籍において，伝統からファッションへ，あるいは年配者から若者へという着物の需要に画期的な変化が現れた時期であり，変化のターニング・ポイントになった年であると提案したい[3]．そこでまず，2002年以降の書籍に注目してみる．

No.4，7，9，20，32についてはすでに述べたので割愛する．

No.1「はじめての私の着物」は，若年層ユーザーが運営する個人のホームページから生まれた書籍である．着物を着用し始めてから日の浅い段階で書かれているので，手入れに関する記述は1.6%，「ポリエステルの着物を洗濯機で洗った」「セルフドライ体験記」程度しかない．

No.3「石田節子のきものでおでかけ」の著者は，着物スタイリスト兼着物販売店運営者であるが，手入れに関する記述は1.8%，「汗取り・シミの点検，専門店に依頼」程度しか見られない．

No.5「きもの，着ようよ!」に至っては，きものの楽しみ方に主眼が置かれ，手入れに関する記述は皆無である．

No.8「京のきもの語り」もまた，きものの楽しみ方を中心にしており，手入れに関しては本文ではなく別囲いの4つのコラムで数行述べられているだけで，記事量は1.1%である．

No.11「一人で着るデイリー着物」は，NHK教養番組「おしゃれ工房」のテキストをまとめたようなもので，まず「着物の種類・TPO」「着つけの仕方」に多くの頁が割かれ，手入れに関する記述はモノクロ1頁にまとめられ，1.0%を占めるのみ．書籍の構成としては，2001年以前の着つけ教本と大差ない．

No.13「今いちばんかわいいおしゃれ　KIMONOあそび」は，「KIMONO道」の影響を強く受けたもので，高級感を感じさせる「着物・和装・呉服」ではないことが特長である．若年層にとっては新奇なファッションであるということを「KIMONO」という表記で示している．ここではしきたりで着るのではなく，「おしゃれ」として着る，「あそび」としての和装である．対象が安価な古着であるからこそ，「あそび」ができることとなったわけだ．本書においては手入れに関する記述は2分の1頁のみ，0.5%にすぎない．内容は「着たあと吊る」「ベンジンで拭く」「シミはクリーニング店へ相談」の3点．安価な古着に，費用をかけて更正することは，最初から考えられていない．

No.17「はじめまして私の着物」では，「KIMONO」という表記が象徴する若年層よりも，やや上の年代の読者層を対象にしたものだが，手入れ記事に関しては量的には全体の1%，内容も「吊る・アイロンをかける・しまい方・シミはベンジンで落とす・専門店に相談する・虫干し」で，詳細に述べられているわけではない．

No.18「決定版　家じゅうの着つけと帯結び」は，決定版と銘打つだけあって，占める割合は1.6%にすぎないが，手入れを専門店に依頼した場合の価格の目安や染め直しまで記述がある．

No.23「森田空美の知的きもの入門」では1.8%．本書に見られる特長は，「ベンジンで衿汚れを自分で始末して，万が一輪染みになっても専門店に持ち込めば簡単に補正してくれるので，積極的に自分でやってみましょう」といった記述であろう．和歌山市の「張正」のインタビューでは，「そういう情報で（自分で）やって，失敗して持ってくる人（客）が多い…（その補正には）費用が高くなる」とあった．どの程度・どの種類までが素人の手に負える範疇であるかのガイドラインがなく，さらに「失敗しても専門家がなんとかしてくれる」という記述を鵜呑みにすると，結果として本人に経済的負担がかかってくるということになる．

No.29「ふだん着物のたのしみ方」は，基本的に家の中で着ることを主眼にしているので，木綿の着物の洗濯に関する記述のみあり，これが全体の1.2%．

No.31「きもの入門」は，雑誌「きものサロン」の過去の記事をまとめて少々加筆したものだが，「入門」とあるように，全くの初心者を対象にしているため，着物の種類・TPO・着つけに多くの頁を割き，手入れに関しては1.4%にとどまっている．

No.33「TPO別　きものの基本」は上記と同シリーズで，対象読者は，全くの初心者の次のステップに当たると思われる．ここにいたってようやく，手入れ記事が2.8%を占め，「きもののお手入れのお店ガイド」として1頁を使い，東京4軒，京都3軒の悉皆業店の紹介と，それぞれの店の価格の目安を明記している．

No.35「KIMONO　mio」はNo.34の雨後の筍本の一つで，古着カタログに徹し，見事に手入れ記述がない．

2002年以降の書籍をざっと見ると，最初に取り上げた比較的割合の高い5冊を除けば，ほとんど述べられていない．さらに過誤をもたらす危険性のある記述，手入れに費用のかかる絹着物そのものを忌避する方向などが見受けられた．あとは免責もあってか，「専門店へ相談」という一言が多い．そんな中で比較的親切だと思われるのは，専門店がどのような作業をするのかの解説と，費用の目安の記述である．

5-2.「着物離れ」以前の書籍

いわゆる和服離れの要因の一つに，メンテナンスの煩わしさと費用の大きさがあった．その結果，面倒でお金のかかる衣類を，わざわざ着なくてもよいとなった．ただしこのことは，手入れの知識の欠如によって着用者がやってはいけないことをした場合や，しなくてはいけないことを怠った場合に起こることであって，適切な判断と処置のできる基本的な知識があれば，費用もかさまずにすむこともあった．では，着物離れが顕在化する以前には，そのような知識が人々にあったのだろうか．

① 1950年代の雑誌付録

No.14と15はともに1950年代の雑誌付録で，まだ日常に和服が多く見られた時期のものである．

No.14「赤ちゃん・子供・婦人・男子　和裁と和装」というタイトルから，家じゅうの老若男女が和装をし，それを家庭で仕立てるという時代であったことが見て取れる．礼装ではなく普段に着るものを，主婦が簡便に経済的に縫うための実用書であるが，巻頭頁には女優をモデルにしたおしゃれ着も掲載されており，実用一点張りではなかった．手入れ記事は2.7%と多くはないものの，繰り回し，洗い張り，染み抜きに4頁，染め替えに1頁使っている．3頁は，当時新しく登場した合成繊維・化学繊維の洗濯方法や取り扱い方で占められ，基本的に「家庭内で処理するための情報」となっている．

No.15「新時代の和服」は，No.14に遡ること2年，まだ合繊・化繊の種類も多くはなく，「新時代」という表現は「いかに経済的に合理的に和服を制作し，デザインを目新しいものにするか」ということを表しているようだ．全体の4.9%が手入れ記事となっているが，一番に「更正和服」があり，「解き洗い」「繕い」の説明がある．まず手元にあるものを家庭において甦らせる方法から始まっているのだ．

2点とも，高価なもの，装飾の凝ったものなどは専門店に依頼するように書かれているが，現在の着用者と大きく違うのは「自らできること・すべきこと」と「専門店に依頼すべきこと」の境界線が自覚できていたこと，万が一失敗しても和裁の基本知識があったため，繰り回しによってそのフォローアップができたこと，つまり失敗の受け皿が経験・知識としてあったことなどが挙げられるだろう．

② 1981年～1990年の特長　－汚さない着方

No.21「装いから仕立てまで　きものと和裁の百科」は，No.14・15の流れを汲むもので，1981年の発行

である．すでに日常に和服姿を見ることは少なくなっていた時期であるので，このあたりが最後の「和裁教習書」の時代かもしれない．ここでは3.9%を手入れ記事に使っているが，繰り回しや家庭で行う洗い張りや仕立て直しなど，1950年代と共通の記事も多い．ここに見られる「着物の解き方」記事はその後の書籍では見かけなくなってしまった．1950年代の2点と異なるのは「汚さない着方」つまり汚れを未然に防ぐ知恵が登場することである．これはその後，継続していく．

No.27「着るコツ　着せるコツ　新感覚の着つけ」(1986年)，No.16「きものレッスン」(1990年)では，手入れ記事はそれぞれ1.4%，0.8%と低い割合であるにも関わらず，その中には「汚さない着方」が掲載されている．ちなみに参考図書Bは1995年発行だが，「汗をかかない努力も必要です」と書かれて水分を控えめにするなどの説明がある．

5-3. 主体の移動

つまり，1950年代には汚れて当然，家庭での処置が可能であった和服が，1980年代には処置の方法を示しながらも，着物は「汚してはいけないもの」となる．日常着から和装が激減した結果，販売品の主流が礼装になったせいもあるだろう．また，和装での体の動かし方が身についていない世代が増えたため，それまでは考えられなかったような汚し方をする例が増えたためかと思われる．1990年代にもそれは受け継がれ，汚してしまった場合の処置の知識も薄れていく様子が見て取れる．礼装がメインとなった着物は「汚してはいけないもの」となり，着用者の方が着物に合わせて自然な行動が制限される．主体が着用者から着物の側に移されたのである．撥水加工のような，未然に汚れを防ぐ加工についての記述が増えるのもこの時期である．衣類は本来汚れて当然であるが，汚してはいけないものとなった時点で，和装品は衣類ではなくなってしまったともいえる．

5-4. ブラックボックス化

2000年代になると「よくわからないものは専門店へ持ち込む」ことが示唆されるが，どんな作業をするのか，それにかかる費用も不明瞭，ブラックボックスとなってしまった感がある．こうして着用者の手では「始末に負えない」ものとなった着物は，リサイクル市場に流れ出るようになり，2002年以降の古着ブームとなる．「始末に負えない」からこそ放出された着物類は最初から汚れている．その購入者の多くは可処分所得が低く，さらに手入れの知識以前の知識もない若年層であった．さらにブームに乗って出版された書籍類には手入れ記事をほとんど載せず，ビジュアル主体で視覚的に訴えたため，汚れたものをそのまま着る人も多かった．インタビューの中でも，古着を張正に持ち込む客は増えていないと述べられているし，筆者の知る悉皆屋でも同様であると聞く．

5-5. 現在ー不信と信仰

現在では若年層でも，合繊や木綿の洗える着物に移行する人も見られる．つまり，簡便に洗いたいから洗える着物を着るか，洗う費用を出せないからそのまま着るか，の二つに分かれた感がある．しかし，着用者の意向で着物の扱いや種類の選択が行われるようになったという意味では，ここで再び主体は着用者側に戻ったともいえる．

ブームの初期には，まず着られるようになること，どんな種類のものがあるのかの知識が求められたが，現在，ブーム(2002年)から3年ほどを経て，着用者側にも手入れ情報を求める傾向があり，これではいけないという反省もあってか，ごく一部かもしれないが，No.33「TPO別きものの基本」のように具体的な記載も見られるようになってきた．ただ，ブラックボックス化した洗い張り業の印象は，実際どんな作業をするのか知らないが，費用が高いという印象のみあって敬遠する傾向か，もしくは「どんなものでもなんとかしてくれる」という無根拠な信仰に近い信頼の両極に分かれてしまっている感が認められる．

6. 調査と考察を終えて

結論として，和装関連図書において，メンテナンスに関する知識・情報の伝達は充分行われていないといってよい．執筆者自身にも知識や経験が少ない印象がある．それゆえか，「君子危うきに近寄らず」的な曖昧な記述か，極端な依存に分裂してしまっている．この事態を打破するには，一つには，洗張り業者

「張正」のインタビューでも指摘されるように[4]，洗い張り・染色業の業界の知識普及の努力が必要であろうが，さらに呉服販売業者も責を担う必要があるのではないか．呉服は，今の時代には珍しい，取扱説明書のない商品であり，知識の伝承が販売業者の良識に委ねられているという側面がある．

たとえば洗濯機でもアプリケーションソフトでも，購入すれば必ず使用説明書があり，相談窓口電話番号が掲載されている．呉服業者がそれを行わないということは，単に売りっぱなしだということになる．手入れの相談も承ります，という店では，処置費用から中間マージンを上乗せて消費者に回すところもあり，手入れには費用がかかると消費者は思いこまされてきたという実情も仄聞している．一般に商品のアフターケアは企業・販売店が行うものだが，呉服に関しては，かつてはより多く生活の技術に負っていた．しかしそれが途切れたにもかかわらず，消費者に自己責任を押しつけられてきたのではなかったか．関連図書における記述の少なさは，そうした盲点としての手入れという生活技術の現実を浮かび上がらせているのではなかろうか．

京都市伝統産業活性化検討委員会が2005年に提出した提言[5]でも，「伝統産業の危機の根本的な解決は最終需要の拡大以外にない」と述べられているが，その方策の中に，商品のアフターケアという視点がすっぽり抜け落ちている．製造業と洗い張り・染色業のより一層の連携が必要だろう．

また，消費者も知ろうとする努力が必要であるし，耐久消費財としての和服の本来の価値を再確認すれば，手入れにかかる費用や手間や時間が，自分にとって無駄なものかどうかの判断もできるようになるだろう．イージーケア・スピード化・使い捨てに慣れた消費者も，和装とその手入れという事態を通して，今一度認識を新たにすべき点もある．それを可能にするには，信頼性の高い情報とそれを消費者に伝えやすい伝達手段の検討とその実践が，今後大いに重要になると考える．本稿は，そうした課題に対する取り組みの第一歩と考えたい．

文　献

1）有限会社「張正」（和歌山市）の小倉正基氏には，現代における洗い張りの技術と普及上の課題などについて，インタビューを行い，多くの知見を得ることができた．それらの内容については稿を改めて報告したい．

2）『近代婦人雑誌目次総覧』は，明治期から昭和20年までに発刊された婦人雑誌300誌を収載する．戦後復刻された代表的な婦人雑誌を除き，現代においてもその果たした意義・役割の高いと思われる婦人雑誌が集めてある．その第1巻の初めに，明治17年創刊の『女学新誌』を載せるが，その後の婦人雑誌にほぼ共通の「教養的」「実用的」「総合的」「目的的」などさまざま内容を含む．具体的な衣服関連記事には，○着物に紋付る事（2号）○衣服に油付たるを抜く妙法（4号）○ゑり丈を早く知る事（8号）など．それらは編集者の指摘するように「婦人雑誌に共通する，よくも悪くも“啓蒙性”をともなう内容」であり，婦人雑誌の性格が推し量られる．

3）2002年の着物情報誌の画期的な変化については，さらに視野を広げ，その背景や理由について改めて独自の検討をしなければならない．たとえば現実の「昔きもの」の再登場などとの関係によって，その必然性や意味づけが独自に明証されているわけではない．本報告では，無作為に選ばれた35冊のなかで際立ったターニング・ポイントとして浮かび上がってきたことを拠り所として，それ以前と以後の情報整理のための方法的分岐点として，これを利用していることをことわっておきたい．

4）上記「張正」でのインタビューによれば，洗張り業者の間でも，かつては生活用語として共有されていたような和裁や和装，織物に関する知識があいまいになっていて，用語集のようなものを作ることが必要ということであった．

5）「～伝統産業を切り拓くために～」，京都市伝統産業活性化検討委員会（2005），
http://www.city.kyoto.jp/sankan/densan/kentouiinkai/teigen.pdf